

# 保育者に求められる「感性」を育む授業の試み

## —擬音語・擬態語の表現に注目して—

鍋島 恵美

### はじめに

質の高い幼児教育の実現に向けて、新たな教育要領が改定される時期を迎えている。その中で、保育者に必要とされる各領域の専門知識・技能はもちろん、他領域にわたる総合的な実践力が必要であることは言うまでもない。しかし、保育者養成校のカリキュラムはそれに対応しているとは言えない状況である。そこで、クロスカリキュラム構築の必要性に向けて、筆者らは、文部科学省科学研究費補助金〈基盤研究(c) 26381297(平成26年度～平成28年度)〉の助成を得て、表現領域の活動について、保育現場の実態や養成校への要請を下記の観点から調査した<sup>1)</sup>。

- ①園での表現活動とはなにか
- ②保育者として求められる表現領域に関する知識・技能・総合実践力とはなにか
- ③養成校学生に期待すること

その結果のなかで、保育者の資質として求められるものは、豊かな「感性」であった。養成校への期待が学生の感性を育むこととして挙げられていた。

### 1. 平成26年度調査の内容及び結果

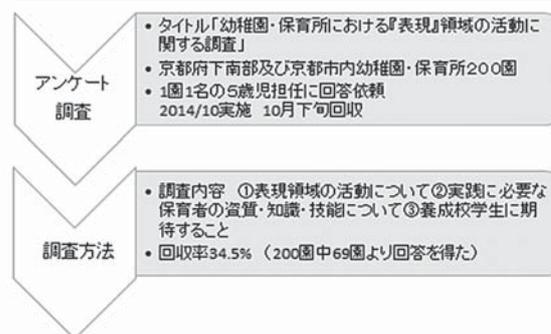
#### - 表現領域「言葉」に関する調査 -

筆者は、共同研究者である和田とともに、本調査の質問項目において、表現活動を実施する際に重要であると考えられる保育者の知識・技能のなかで、言語表現分野について尋ねた。この調査項目の選定に関しては、筆者らが保育所保育指針・幼稚園教育要領に明記されている、言葉の獲得に関する領域「言葉」を鑑みて、保育現場で取りあげられている保育内容や教材・子どもに対する保育者の語りに関するものを取りあげた。ついでに、言語表現活動にかかわる、もっとも重要であると思われる保育者の知識・技能として、以下の9

の3つを選んで回答を依頼した。

1. 絵本、紙芝居、パネルシアター、ペープサートなどの文化財の知識・技能
2. ことばのリズム、ことば遊び、わらべうた遊びの知識・技能
3. 素話の知識・技能
4. 日本伝統芸能の知識・技能
5. ことばに関する感性を磨く知識・技能
6. 声色や声量を調整する知識・技能
7. 子どもや保護者や教職員とコミュニケーションをとる知識・技能
8. 非言語的コミュニケーション(表情、しぐさなど)の知識・技能
9. その他: 具体的にお書きください( )

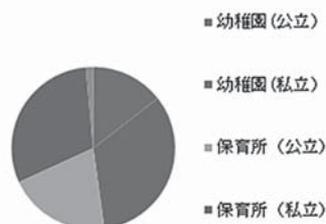
### 研究方法



(平成27年保育学会ポスター発表資料より抜粋)

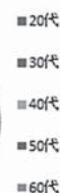
### 回答のあった園の内訳

有効回答69園の内訳



### 回答者の年代別内訳

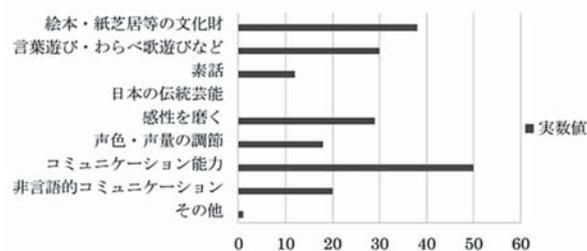
5歳児クラス担任の年代



(平成27年保育学会ポスター発表資料より抜粋)

その結果は、回答者 69 名中「子どもや保護者や教職員とコミュニケーションをとる知識・技能」が 50 名で最も多く、次いで「絵本、紙芝居、パネルシアター、ペープサートなどの文化財の知識・技能」が 38 名であり、「ことばのリズム、ことば遊び、わらべうた遊びの知識・技能」が 30 名、「ことばに関する感性を磨く知識・技能」が 29 名、「非言語的コミュニケーション（表情、しぐさなど）の知識・技能」が 20 名、「声色や声量を調整する知識・技能」が 18 名、「素話の知識・技能」12 名が「日本伝統芸能の知識・技能」が 0 名、その他「言葉にならない子どもの思いを言葉で返す」との回答が 1 名であった（表 1）。

表 1 言語表現にかかわる最も重要である知識・技能



（平成 27 年保育学会ポスター発表資料より抜粋）

この結果から、最も多く回答のあった「コミュニケーション能力」は、2008 年の幼稚園教育要領の改訂にあたって、子どもの言葉によるコミュニケーション能力の育ちの問題として取りあげられ、新たに領域「言葉」の内容の取り扱いに「幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること」と示されていることから、子どものみならず、子どもを保育する保育者にとっても重要課題となってきたと考えられる。現代の学生は、スマートフォンなどの情報機器によるメールやラインのやり取りをコミュニケーションツールとして利用することが多く、相手の思いを直接感じつつ言葉を選びながら伝え合う（コミュニケーション）という経験が非常に希薄化していると認められる。それに反して、保育現場においては、子どもの保育のみではなく、家庭との連携とともに保護者の子育て支援が重要になってきていることや、チーム保育などの保育者間の連携についても重要視されている昨今、言葉による伝え合

いが保育者の専門性として重要であることの認識は、保育現場も大学でも変わりのないことがうかがえる。

次に、多くの回答があった「絵本、紙芝居、パネルシアター、ペープサートなどの文化財の知識・技能」については、領域「言葉」のねらいにおいて、「3. 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語に親しみ、先生や友達と心を通わせる。」とあり、内容では「9. 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう。」とされており、保育現場では、子どもの生活の中になくはならない文化財（教材）のひとつとして、取り扱われているが故の結果であると考えられる。次いで「ことばに関する感性を磨く知識・技能」「ことばのリズム、ことば遊び、わらべうた遊びの知識・技能」であるが、内容に「7. 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気づく」とあり、「声として発せられた音声の響きやリズムには、音としての楽しさや美しさがある。・・・言葉を覚えていく幼児期は、このような言葉の音がつまみや美しさに気づく時期でもある。幼児は、幼稚園生活において絵本や物語などの話や詩などの言葉を聞く中で、楽しい言葉や美しい言葉に出会うこともある。…教師の話す言葉に耳を傾けることにより、言葉の響きや内容に美しさを感じ、改めて言葉の世界の魅力にひかれることもある。」と述べられていることから、前者の回答は、保育者自身が子どもにとっての人的環境であることの重要さと、後者では、子どもの発達特性に適した遊びのひとつとして保育現場では取り扱われている結果であると言えるであろう。大学においても、保育内容科目の授業を通して、学生がそれらの文化財や遊びに触れ学ぶ機会が多い。しかし、子どもを前にして語る経験や子どもと一緒に遊ぶ経験は、ボランティア活動や実習の経験に頼ることになる。そこでの体験が、生きた学びになっていることは自明である。

一方、学生の言葉は、現代事情を反映しており、「めっちゃ・・・」「これ、すごくない!？」などの仲間内で通じる言葉と、公式な場面での言葉の使い方の乱れが指摘されて久しい。したがって、今の学生が暮らしている中で言語感覚と、保育現場に出た時に求められる言語環境とのギャップをどのように埋めていくかが大学に問われているとも考えられる。学生自身が、授業を通して絵本や物語等々に触れて学び楽しむつつ、言葉の楽しさ美しさに気づく多様な経験を積むこと、

つまり、幼児期に求められる体験と同様な体験をしてみることが保育者として重要になるのではなかろうか。回答が少なかった「非言語的コミュニケーション（表情、しぐさなど）の知識・技能」、「声色や声量を調整する知識・技能」は、言葉を使い語る時に無意識になされることが多いからであろうか。次に、「素話の知識・技能」の回答が低かったが、素話には、保育者が語る言葉に耳を傾け、保育者の「非言語的コミュニケーション（表情、しぐさなど）」に頼りながら、子ども一人ひとりが自由に想像の世界を楽しむことが可能となり得るのにふさわしい活動であると、筆者らは捉えている。また「日本伝統芸能の知識・技能」が0名であることも残念な結果に思える。この結果のギャップに関しては、学生にそれらの重要性を伝え、学生からその文化を子どもの世界（保育現場）へ持ち込んで子どもと一緒に遊び楽しんでほしいと願う。

次に、保育者の資質として重要な事柄を質問した結果が質問項目とともに図1に示している。技能・活用能力・技術の習得があげられる中で、表現活動に関する豊かな感性を非常に重要であるとの回答が一番多く見られた。そこで、筆者は学生が「感性」を養成校で身に付けるには、どのような授業内容・方法が有効となるのかを新たな研究課題の一つとした。

表現活動を指導する保育者の資質として重要な事柄

	重要でない	あまり重要でない	どちらでもない	重要	非常に重要
身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する豊かな感性	1	0	3	24	40
身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する技能	1	1	7	44	16
身体・音楽・造形・言語等の表現活動にかかわる教材などを子どもの発達に合わせて作成・活用する能力	1	1	4	30	32
身体・音楽・造形・言語等の表現活動の指導法の習得	1	1	8	35	24
保育のねらいに則し、子どもの遊びを豊かに展開するための技術の習得	1	1	2	31	34
表現活動の観点から子どもの発達をとらえ、具体的な表現活動に結びつける事のできる能力	1	1	2	27	38

(平成 26 年保育学会ポスター発表資料より抜粋)

図1 保育者の資質として重要な事柄

## 2. 平成 27 年度研究の内容及び結果

科研2年次では、総合的な子どもの遊び（表現活動）を創造するのに重要となる他領域とのクロスカリキュラムの試案を作成しつつ授業をしていくことを目的とした。そこで、筆者は専門である言語領域を担当しつ

つ、特に保育者に求められる「感性」を育む授業を試み実践することとした。

### (1) 授業計画及びその内容

平成 27 年度後期の開講科目である「保育実践演習」のテーマとして「総合表現」を取りあげ、身体表現、声、音楽、言葉の領域を専門とする4名の教員（智原、和田、田中、筆者）で15回の授業を担当した。本科目は幼稚園教員免許・保育士資格取得のための実習を終了した短期大学部2年生60名が履修する、保育者になるにあたっての集大成科目である。担当教員で検討を重ねながら次のように15回の授業を展開した。言葉の領域を担当する筆者は、特に言語感覚を磨く「感性」を育みたい願いを持って授業に取り組んだ。

【第1段階】・総合表現のねらい説明とガイダンス（1時間）/身体（ボディソックス）、声と動き（ブレイクロス）、音楽（カホン）、言葉（谷川俊太郎作の赤ちゃん絵本 - 擬音語・擬態語の絵本 -）による表現を受講生が4グループに分かれて体験した後、感じたことを絵の具とローラー、和紙と絵の具、サインペンなどを用いて造形表現（4時間）

【第2段階】①第1段階の活動の振り返り（映像も含む）と感想をオノマトペ（擬音語・擬態語）とポーズで表現（1時間）/これまでの経験で感じたことを学びの履歴として“オノマトペ譜”として表す（1時間）

②音楽と声と言葉、言葉と身体との2領域をクロスさせた活動の経験（1時間）

【第3段階】①4グループ（A～D）に分かれ、題材を取りあげこれまでの経験を活かした作品の創作（3時間）②中間発表と改良・リハーサル（2時間）③園児（4歳児）を対象とした作品の発表（1時間）④発表の反省と授業全体の振り返り（1時間）

### (2) 実践経過と考察

#### 1) 第1段階 オノマトペの絵本に注目して

##### i. 授業のテーマ及びその内容

授業のテーマは「赤ちゃんから絵本を味わう - オノマトペ（擬音語・擬態語）の世界 -」とし、谷川俊太郎/文、クレヨンハウス出版の「赤ちゃんから絵本」5冊を取りあげた（表2）。

表2 取りあげた絵本 と 帯に書かれた概要

- ・「にゆるぺろりん」長新太/絵 キャンディーをぺろりん。そのとたん「にゆるにゆる…」とあらわれたのは…
- ・「んぐまーま」大竹伸朗/絵「ばーれ あーれ あなはんら！」この不思議な生き物はどこへ向かうのか
- ・「とこてく」奥山民枝/絵「とことこ…」「てくてく…」赤い道を歩いていくと、いろいろな出会いがあります。
- ・「ぼぱーぺ ぼびはっぷ」おかざきげんじろう/絵「ぷっほぺっぴ」「ぺぼぼぱふべ」色が、かたちが、音が、絵本から飛び出します。
- ・「あーん」下田昌克/え、谷川俊太郎/ぶん「あーん」と「ふるーん」で毎日生きるあかちゃんへ！



写真1 取りあげた絵本5冊

また、創作表現ができる教室として、学習ステーションの自習室を使用し、下図(写真2)のように環境を構成した。受講生15名を抽選で5グループに分け、誰もが表現する主体者となるように配慮した。取りあげた絵本は、あらかじめくじ引きで分かれるそれぞれのテーブルの上に置いておいた。

次に、表現イメージが誘発されるであろうとの願いを込め、音の出る玩具、木製の車の玩具、仮面、ブレイクロス、箱太鼓、一音ごとに違う材質で作られた木琴を準備した(写真2)。仮面を用意したのは、それを身に付けることで、恥ずかしさを超えた自由な表現が生れるであろう効果の期待からである。テキストとして用いる「赤ちゃんから絵本シリーズ」は、絵本を開けるとそこには、詩人である谷川俊太郎独自の言葉



写真2 授業室内の構成 保育実習室内 仮面をつけて

の世界(擬音語・擬態語の世界)が広がる。平成30年度から施行される幼稚園教育要領等に社会情動的スキルが重要とされるが、その非認知能力とも呼ばれる情動の世界を刺激する素材でもある。

## ii. 授業の取り組み及び結果と考察

受講生は、筆者から「頭で考えるのではなく、体を通して言葉を味わってほしい」と伝えられた。すると、くじ引きで出会う3人の仲間とテーブルを囲んで着席すると同時に、置かれている絵本を手を取った。そして、「なにこれ?」「何の言葉?」「意味わからん」と、口々に訴え、「私たちに何をさせようというのか!?!」というまなざしで筆者を見つめた。しかし、筆者は「言葉を味わってほしい。あなたたちは、実習も済んで子どもたちと遊んだ。その経験を思い出して、ここにあるいろいろなおもちゃや音の出る楽器を使って、感じたことをありのまま表現してほしい。保育内容領域「言葉」に述べられているように言葉を味わってほしい」と本授業のねらいを繰り返した。

すると、絵本を見てしばらくすると、音の出る玩具などが置かれた中央テーブルに集まって、いろいろな音を出したり聞いたり試したりするグループが出てきた。それがきっかけとなり、他のグループもそこに集まり、「この言葉はこんな感じ!?!」「これもいいねえ」と、手にして遊びつつ絵本の世界を感じようと試行錯誤する姿が見られた(写真3)。



写真3 イメージを誘発する物的環境 誘われて



写真4 赤ちゃん絵本を味わう 開けてみると

- 擬音語・擬態語の世界 -

一方、じっくりと絵本を開き、うふふと笑ったり、

えっと驚いたりという表情がみられるようになってきた。それは、受講生の情動が動く瞬間でもあり、感受性ととも言葉に味わう姿（写真2,3）のように思われた。



絵本「あーん」を読み始めたAさんは、表表紙に戻りじっと見つめていた。そして、「先生 これミスプリントでしょうか？ たにがわしゅんたろう ふんって…“ふん”

と書いてあるんですけど」と、筆者に話しかけてきた。「あーんとぷーんで毎日生きてる赤ちゃんへ」と書かれた表表紙のステッカーをじっくり見て、ストーリーを味わったAさんが、「なるほど あはははは」と吹き出してしまった。そして、本授業の最終回の日に課した振り返りシートに次のようにその日のことを述べている。「…特に言語での取り組みで、絵本の世界をいろんなものを使って表現したことが印象に残っています。普段は、さっと読んでしまう絵本だったけれど、言葉の意味、絵本の世界、背景、作者の意図など、さまざまなことを考えながら読み解いていくことで、とても楽しく面白く感じました。…」

最初は「意味不明」と意欲的でなく始まった授業から、徐々に準備された音の出る玩具や仮面などの物的環境に誘われ、叩いて音を奏でたり、持って動かしてみたり、プレイクロスを丸めたり投げたりと主体的にかかわる姿がみられるようになった。そして、音やリズムや動きや感触など体を通して確かめつつ、赤ちゃん絵本の世界を表現しようと試行錯誤が繰り返された。その過程の中で、受講生たちは、遊び感覚を味わい五感を通して感性を研ぎ澄ませているように思われた。

それぞれの絵本の朗読と共に、感じたことをおもちゃの動き、プレイクロスの質感と動き、音など交えて表現しようと恥らいながらも挑戦した。

最後には、本授業の振り返りとして、文章表現ではなく、あえてローラーと絵の具を使って模造紙に協同の造形表現を試みた（写真5）。これにも驚きを隠さなかった。

絵の具を溶いたり、ローラーを使って無作為に表現する遊びは、「こんなことしたことない」「えっ 好きに描いていいの」「ペタペタするの面白い」「絵の具で



写真5 造形表現の振り返り

コロコロするのも夢中になった」「絵の具でペタペタした感触が、手形がしたいという衝動に駆られた」と初めての試みにドキドキワクワク感を表し、表現手法の多様性を体感していた。授業後に提出された受講生の振り返りコメントには次のように綴られている（表3）。

表3 絵本を味わい表現した後のコメント

「ぼぱーぺ ぼびぱっぷ」では

・ぺひぺひぺ 擬音を音で表現したり、一人ひとりが読んでも全然違うものになるんだと思った。

・擬音語を伝える時は、人によって発音（イントネーション）が違ったので、それが楽しかったし、おもちゃや楽器を使うことで、表現の仕方が変わると感じぶたぶ（た）。ぱぼびぱっば（楽しかった）。波線文：受講生の擬音語を引用したユーモア

・意味のない言葉をお話（表現）してみるのは楽しかった。「ぱぱぱ」とか、°のつく言葉は柔らかな感じに聞こえる。

「んぐまーま」では

・初めて絵本を読んだときには「なんじゃこれ」と思ったけど、何回も読んだらなんとなく意味が分かったり、ホワホワした気持ちになりました。

・言葉を丁寧に伝えることが面白かった。1文字を1粒に考えてすることを意識しました。楽しかったです。

「あーん」では

・シンプルな言葉だけど、読み方や捉え方によって変わる！作のところが、「ぶん」ではなく「ぶん」だった。

・おもちゃをボンボンしたり、プレイクロスをふわふわしたりして絵本を表現して楽しかった。「文」が「ぶん」になっていて遊び心があるなど感じた。

「にゆるぺろりん」では

・「ぺろりん」は、なめている様子を感じ表現するに

は布を使うことができると感じました。音やによる  
 によるなどを体や物で表現する面白さを感じました。

・「にゆるぺろりん」は聞いたら楽しいけど、読む側  
 は頭が「ぐるぐる」になってしまう。

「とこてく」では

・言葉だけでは伝わらないことを表現しながらする  
 ことで伝えやすくなるし、「トコトコ」を歩きながらす  
 ると見ている方も楽しくなって一緒に動いてくれると  
 感じました。

・同じ言葉の擬音語でも語り手の話し方や動作で様々  
 な捉え方があるのだと感じた。

・表現するのは難しかったけど、他のグループのを見  
 ていると不思議で面白かった。

・谷川俊太郎の絵本の擬音語は、表現するのがすごく  
 難しい物ばかりでした。けれども、いつも言葉で話す  
 よりも擬音だけで何かを表現するのも楽しいだろうな  
 と思いました。

コメントからは、受講生は戸惑いながらも、物的環  
 境に誘われて、感じる物を手に取り、動かし、見つめ  
 ながら言葉や絵から受け取るイメージを五感を通して  
 確かめていることが分かる。思いのまま多様に表現す  
 ることの面白さを味わいつつ、子どもの頃の遊び感覚  
 を取り戻しているようである。その心情を表現してい  
 る気づきの箇所に波線を引いて思いを受容し、感覚的  
 につかんでいる表現を評価した。

## 2) 第2段階 「言葉」と「からだ」の

### コラボレーション -表現を楽しむ-

#### i. 授業のテーマ及びその内容

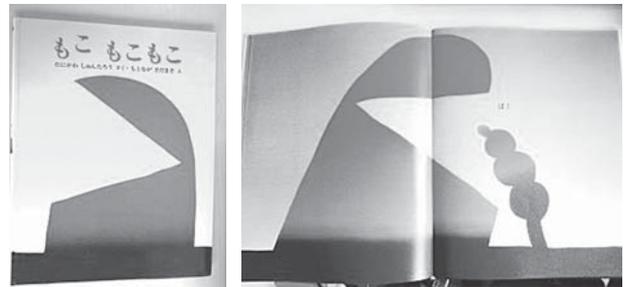
授業のテーマは『谷川俊太郎の「ことば」の世界と  
 「からだ」のコラボレーションを楽しむ』とし、筆者  
 の担当である表現領域「言葉」では、第1段階の授業  
 で用いた谷川俊太郎/文、クレヨンハウス出版の「赤  
 ちゃんから絵本」5冊と新たに谷川俊太郎/作・元永  
 定正/絵、文研出版の「もこもこもこ」を取りあげた(表  
 2、4)。科研の筆頭研究者である智原が担当する表現  
 領域「身体」では、第1段階で全身をすっぽりと包む  
 ボディソックスを用いた身体表現を経験しているので、  
 それを新たに物的環境として取り入れることとした。

### 表4 新たに取りあげた絵本と作者のカバーの言葉

・「もこもこもこ」もとながさんは、えかきのくせに、  
 にんじゃのしそんで、にんじゃのしそんのくせに、  
 ろしやじんみたいなかおをしていて、ろしやじんみ  
 たいなかおをしているくせに、〈そやけどねえ、あ  
 かんわ〉などといいます。もとながさん、へんなえ  
 がだいすきなので、いっしょにこのえほんをつくり  
 ました。そうしたら、えほんもすこしへんなえほん  
 になりました。かぜをひかないように、きをつけて  
 よんでね

谷川俊太郎

1977年第1刷/2015年第89刷の絵本



そして、第1段階で使用した物的環境に新たにテク  
 スチャーの違いが感じられる材質の布(90cm幅2m)  
 を準備して加えることにした。動くものとして新たに  
 ゴムボールや風船も加えた。また、2領域の合同授業  
 になり受講生の人数が30名(15名×2)になるので、  
 十分に創作表現ができる教室として、保育実習室を使  
 用し、下図(写真7)のように環境を構成した。受講  
 生30名を抽選で6グループに分け、誰もが積極的に  
 表現する主体者となるように配慮した。取りあげた絵  
 本は、あらかじめくじ引きで分かれて、それぞれが集  
 まるフロアーのグループの場所(1m四方のカラーマッ



写真7 保育実習室の環境

ト)に置いておいた。室内が、明るく楽しい雰囲気になるようにカラフルに色彩を考慮して表現を楽しめる環境を構成しておいた。

ii. 授業の取り組み及び結果と考察

前回からの続きで受講生は、ずいぶんと授業内容に適応しつつあるように感じた。筆者から、今まで体験的に学んだ領域「言葉」と「身体」の表現を存分に味わってほしいとの願いを込めて「ここでは、ことばとからだのコラボレーションを楽しみ・味わう」と伝えた。さらに、なぜ楽しみ・味わうのか、幼稚園教育要領・保育所保育指針の保育内容のねらいと内容を振り返り学びあうとともに、幼稚園教育の基本である「環境を通して行う」ことの意味を授業の中で、体感できるように表現を楽しめる環境として具体的に多様な物の種類や材質やそれらの配置など工夫を凝らした。

受講生は、くじ引きで出会う5人の仲間とフロアに敷いてあるカラーマットを囲んで着席すると置かれている絵本を目にした。彼らは、自然に決まった絵本の読み手の周りに集まり、読み手の言葉に耳を傾け始めた。限られた時間の中で、表現意欲を誘いかける物的環境として置かれている中から、ゴムボールを選んで、それをもちこんで話し合いを始めたり、絵に描かれていると同じ色合いの布を選び足元に置き、立ち姿勢になって体を使い表現しようと活動し始めた。絵本「とくてく」を取りあげたグループは、そこに描かれた赤い一本の道を赤い布で表現しその上をトコトコ歩いたり(写真7)、違うグループでは、室内にあった幼児用の椅子を並べて道に見立て、そのうえをトコトコ歩いたり下に降りたりと、歩く道に椅子を用いることで動きの高低感が表現された。



写真8 布・音・色に誘われ 動き出すからだ



写真9 ボディソックスを用いて

一方、ボディソックスを用いて絵本「もこもこもこ」の中にある「もぐもぐ」を全身で表現しようと試み、ボディソックスが伸縮する動きの弾みや、ぴょこんぴょこん、ピーン、パッなどという多様な動きの面白さを彼ら自身が味わっていた。また、「にゆるぺろりん」では、ボールやひもを用いて、ボディソックスを着ている表現者と対話する動きの表現が生れた。ここでも、表現者自らから思わぬ動きの面白さに笑いが起こった。

幼稚園教育要領第2章保育内容領域「表現」の内容には「(1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ」とあり、また「(8) 自分のイメーを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう」とある。これらの幼児の学びの内容と同じく、受講生の姿からは、絵本の世界の言葉の語りに耳を澄ませ、色や形で表現された絵の世界を感じるがままに、今ここある様々なもの(音、色、形、手触りなど)を使って動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする楽しさを味わっていることが分かる。心の思いのままに動く幼児の世界と同じような感覚をもって仲間とともに楽しさを共有している。このような共有こそが、子どもの理解を深め保育者になる基礎を創るのではなかろうか。そして、この過程の中で豊かな感性が育まれるのではないかと考える。

3) 第3段階 表現領域「ことば」「からだ」

「こえ」「おと」の総合性

- 谷川俊太郎の「もこもこもこ」の世界を味わう -

i. 授業のテーマ及びその内容

学園内の光華幼稚園の協力を得て4歳児を招待して発表会をすることを目標に創作活動に取り組んだ。担当する教員が4名なので、第1段階からグループ活動

をしている60人の受講生を4グループに分け、筆者は、その中の1つのグループBSB (Blue Sky Blues) を担当することとなった。表現領域「言葉」「身体」「音」「声」の4領域をクロスさせた総合表現の取り組みである。筆者のBSBグループのテーマは『谷川俊太郎の「もこもこ」の世界を味わう』とし、第2段階の授業で用いた谷川俊太郎/作・元永定正/絵、文研出版の「もこもこ」を取りあげた(表4)。この絵本は、見開き15場面構成されており、15名を3チームにくじ引きで分け5場面ごと(A,B,C)に取り組むこととした(表5)。数人の小チームに分けることは、一人一人が主体性を発揮して取り組んでほしいという願いからである。教室は、保育実習室を智原が担当するグループと共有して使用することになった。そうすることで、授業者の専門性を交流させ双方のグループ指導に係れるとともに、受講生にとっても互いに刺激しあえる環境になると考えたからである。

表5 絵本の 文の言葉と絵の色・形・動き

A 1場面	しーん	紫	白	青				
2場面	もこ	紫	黄	濃い青				
3場面	もこもこ	によき	紫	橙	黄緑			
4場面	もこもこもこ	によき	によき	紫	橙	黄	緑	
5場面	ばく	紫	橙	赤	緑	桃		
B 6場面	もぐもぐ	紫	黄	青				
7場面	つん	紫	黄	赤	薄紫			
8場面	ぼろり	紫	黄	赤	黄紫			
9場面	ふうっ	紫	薄紫	赤	緑			
10場面	ぎらぎら	赤紫	赤	黄	茶			
C 11場面	ばちっ!	茶	赤紫	朱	黄	白		
12場面		紫	黄	橙	薄桃	黄緑	黄赤	
13場面	ふんわ	ふんわ	ふんわ	ふんわ	ふんわ	ふんわ	ふんわ	
14場面	しーん	紫	薄青	青				
15場面	もこ	紫	黄	青				

注: 色・形・動線は筆者のイメージである

## ii. 授業の取り組み及び結果と考察

### 【3チーム(A,B,C)に分かれて取り組む】

授業時間15回の中での9-11回の3時間を各チームの創作活動とした。偶然に出会う仲間であるBSBグループの中で、さらに3チームに分かれての取り組み

である。当初はぎこちなさが目立った。1限の授業でもあり、なかなかムードが高まらない様子で話し合いになるまでには時間を要した。物的環境としては、前回と同様に、音、形、色、動き、テクスチャーなどの刺激からイメージが誘発されそうだとと思われるものを準備した。チームには、A4サイズの内紙一枚に活動記録、確認事項、次回に必要なものを記録して提出すること、個々には、活動後の気づきを粘着メモ(75mm×75mm)に書き提出することを課題とした。それらに綴られたA,B,Cチームごとの授業の取り組みの過程や、個々の表現活動に対する心情・意欲・態度は、表6のとおりである。筆者は、活動記録には、多様な表現に気づくコメントを返し、必要な物は次回までに準備し、間接的な援助を心掛けた。また、個々の気づきで、心情・意欲・態度が素直に表現されている文章に波線を引いて「なるほど」と受容し感受性や受講生の表現意欲を高めていった(斜体表記)。

表6 創作活動の取り組み過程及び個々の気づきの変化

### Aチーム 9回の授業では

#### ○音と体で表現する

1場面 しーん

2場面 <sup>ドド#</sup>もこ 赤い布を筒にして 中に入る

3場面 <sup>ドド#レ#</sup>もこ <sup>ミソ</sup>もこ <sup>によき</sup>によき

4場面 <sup>ドド#レ#ミ</sup>もこ <sup>によき</sup>もこ <sup>によき</sup>によき



によき

5場面 ばく 覆いかぶさるように

必要なもの 2mの布(赤、オレンジ) フラフープ

筆者のコメント: 「もこもこ」と「によき」 対象的表現の方法を考えてはどうでしょう

個々の気づき: 言葉を音で表現する作業は作問するみたいで楽しい(作業、作問と創作の違いは?) / 絵本の絵を人間で表現するのは難しい(楽しんで味わって) / 絵本の世界を体や物を使って表現するのは難しい(頭と体を柔らかく) / 場面ごとに表現が違うので面白い物ができると思う(期待しています) / ただ絵本を読むだけでなく音+動作を付けてみると躍動感があって楽しい(楽しいと感じることが一番)

### Aチーム 10回の授業では

○場面ごとの効果音を確認 / 場面の役割を決定 / 用いる物の素材を決める

もこ 背景 この背景の後ろに「もこもこ」役が隠れている



布をピンと貼る棒が必要

必要なもの フラフープ大2個 棒。(水色の布に付ける)

筆者のコメント:棒の代わりに2名で布の持てばどうか動きが出る

気づき:効果音と一緒に担当する人、材料など細かく決まってよかった。流れも大体決まったのであとは、みんなの案を取り入れてよいものにしたい(その通りだね) / どんな動きをしたら相手に分かりやすいのか、絵本を表現できるのか考えるのが面白い(面白いと感じて表現できるのが一番です。ハートが伝わるから) / 効果音を場面ごとに考えるのは難しいと思うこともあるが、しっくりくるものもあり、みんなで案を出し合いながら合うものを探すのが楽しい(楽しいと感じること、案を出し合いながら進めることが協同的な学びに繋がる) / 今日は代用品で「もこもこ」の背景を作った後は練習あるのみ(4歳児が引き込まれるような表現になるといいね)

#### A チーム 11回の授業では

○流れの確認/動きを見てピアノを合わす/次回は「によき」の動き決めと衣装決め

筆者のコメント:リハーサルまでにもこもこ表現に使う物の準備をした方がよい

気づき:自分たちのアイデアがうまくまとまればいいな(音と動きをどの様につなぐのか楽しみ) / 「もこもこ」の表現している様子が頭で考えるとどう表現してるのかわからない。子どもに分かるようにするには、簡潔に表現するのが大切だと思いました(によきによき期待しています。子どもの面白がる顔を想像してみしてほしい) / 自分たちが客観的に見てアイデアを出すと、いろんなアイデアが生れると思う(リハーサルでは気づくことがいっぱいあるよ) / 場面の終わりのことも考えなければならないのだと分かりきした(さあどう結ぶかが楽しみ) / 幕(青い布)に棒を付けてイメージ通りできた(棒を持つあなたも表現体です)

#### B チーム 9回の授業では

○BSBのグループの中で3チームに分かれる。絵本にちなんで、いろんな物で表してみる。絵本の担当す

るページに、すべて黄色の“ポコッ”と出ている部分をボディソックスか布でその中に一人入って表現してみる。

- 6場面 もぐもぐ 何か食べるふりをする
- 7場面 つん ボディソックスからボールを出して表現する
- 8場面 ぼろり ボディソックスからボールを落とす
- 9場面 ふう 赤色のボールをボディソックスから出す

#### 10場面 ぎらぎら

・できたら、ボディソックスの中に二人で入る  
 ・4歳児20名にブレイクロスを一人ずつ渡して「もぐもぐ」の部分を一緒にやってみる

必要なもの:ビニールボールの赤/ブレイクロス20枚程度/大判ブレイクロス2~3枚

筆者のコメント:子どもと一緒に参加型にするのはいいアイデア!存分に言葉を味わってほしい。赤ボールは、実習室の倉庫を探そう!

気づき:疲れた!だらだら(なるほど 最後はホット力が抜けた?) / ダラダラ(なるほど なかなか決まらないのか?) / モグモグ ガサぶり(ボディソックスの表現いいねえ) / 皆で表現するのにごちゃごちゃしていて、でも最後はまとまって良かった(よかった!一人一人の考えがあるねえ)

#### B チーム 10回の授業では

- 6場面 もぐもぐ プレイクロスを配って、ボディソックスの中に入れ食べたふりをする
- 7場面 つん ボディソックスの後ろから赤のボールを出す
- 8場面 ぼろり 赤のボールを後ろから落とす
- 9場面 ふう 風船を膨らませる
- 10場面 ぎらぎら 風船を使って飛ばす。

その風船に金と銀の折り貼る  
 筆者のコメント:なし(グループの雰囲気が非協同的に感じるので、個々の気づきに対して、それぞれの気持ちを受容するように心がける)

気づき;風船を使って表現。他のチームも楽しみ(物を使って表現するもよし、あなた自身のボディも表現

体です) / 難しい どうしたらいいかわからん。他のチーム楽しそう (きつとりハーサルが済んだらヒントがあるよ! 前回楽しそうだったよ。思い出してごらん) / 難しい わからない どうしてほしいのか伝わらない (あなたが表現したいように自由にして、みんなにアピールすればいい) 風船に金や銀を貼りつけてみたりと作業するのが楽しかった (一人一人 “作る” ことは楽しい。そこから、5人で “表現” する楽しさが味わえるといいなあ) / 頭で考えず、子どもになった気持ちで楽しむ!! (その通り 風船を膨らます時の息のはいる音、膨らますあなた自身も表現体、観ている側からは、面白くいいなあ ほのぼの感)

### B チーム 11回の授業では

○役割決め できていない場面から確認する

10 場面 ぎらぎら 9 場面で膨らませた風船とは別に もう一つ金銀を張り付けた風船を用意しておき、取り替える。

9 場面 ふう 赤風船を膨らませる

8 場面 ぼろり 赤のボールを後ろから落とす

7 場面 つん 赤ボールを後ろから出す

6 場面 もぐもぐ ブレイクロスを子どもに配る  
→子どもに食べさせてもらう

必要なもの: 赤い風船数個、金銀の折り紙を数枚追加  
筆者のコメント: がんばりましょう!

気づき: わくわく完成が楽しみ (いいですねえ 2人欠席の中でみんなをリードしている姿に♡) / ドキドキ (なるほど! 次にわくわくなるように楽しみましょう) / ドキワク! (よく分かる。子どもの喜ぶ顔を想像してがんばる)

### C チーム 9回の授業では

○絵本の場面を見ながら、身近に用意されたものを持ってきて実際に触ったり確かめたりしつつ場面のイメージをみんなで話し合う。

材料を作る。できていない場面から取りくむ

13 場面 ふんわ 材料を作る → スズランテープ (白) を腰に巻いて表現してみる

12 場面 ぱちん 音をいろいろあるものでならしてみる

必要なもの: スズランテープ (白)、布 (紫) 4枚

気づき: みんなと考えることが楽しかった。どんなものができるか わくわくする (主体的で、いきいきしている) / ふんわふんわの部分をどう表せるか考えた。スズランテープで 何度も表わした (その時の感じを書きましょう) / ふんわふんわを表現できて よかった (そして今どんな感じなのか) / スズランテープでふんわふんわを作った (そして今どんな感じなのか)

### C チーム 10回の授業では

○役割を決める

13 場面 ふんわ 腰にスズランテープ 頭の上から布を被る (4人)

14 場面 しーん 紫の布をかぶって寝ころぶ

15 場面 もこ 14 場面で登場した人が紫の布をかぶったまま「もこ」と尻を突き出す

12 場面 次回に考える バルーンから素材変更

11 場面 クラッカーの音を怖がらないか 再考 音さがし

必要なもの: サテンの布 (紫)、チュールの布 (紫)、紙コップロケット

気づき: みんなでどうするか話し合いができて、一つの形になってきた ように感じます。でももっと ユーモアがあってもいい と思います (いいと思うことは何でもやってみましょう) / ふん輪を体とチュールを身にまといどう表すか、実際に試したり、話し合っイメージに近づけることができた (その表現の *utr* を視聴して感じてみましょう) / 「しーん」と「もこ」を担当することになった。頑張りたいです (対照的な表現です。頑張りましょう) / 「ふんわ」を布やスズランテープで表現した (どう感じたの)

### C チーム 11回の授業では

○それぞれパートを確認

11 場面 ぱちん クラッカーを鳴らす (音・飛び出す中身あり)

12 場面  バルーンを飛ばす

13 場面 ふんわ 腰にスズランテープ 頭の上から布を被る (4人)

14 場面 しーん 紫の布をかぶって寝ころぶ

15 場面 もこ 14 場面で登場した人が紫の布をかぶったまま「もこ」っと尻を突き出す

必要なもの：クラッカー中に何か入っている物、バルーンと空気入れ

筆者からのコメント：14～15にかけての床に滑り込んで、もこっと尻を持ち上げる動きがいいねえ  
 気づき：場面ごとにみんなの思いがあるから、どうにか人がうまくつながればいいな（そうだね リハーサルを見て感じて繋がっていくと信じてる♡アイデアは面白い！）「ばちん」でも「ふんわ」でもその言葉を音で表したり、体全体で、さまざまな素材を使って表現することが大切だと感じましたし、自分たちもそれを理解して感じないといけない（楽しんでふんわふんわと宙に舞う感覚を味わってほしい）！絵本をわかろうとするのではなく、感じるということが分かりました（ラストシーンユーモラスだけど、ジーンときます）！他のグループのを見て「ばくっ」のところすごいと思った。自分が実際にやってみて、もこもこの擬音語を体感できて楽しかった（その感覚を忘れずに、子どもの楽しむ顔を想像して）

それぞれの取り組みを授業時間の経過とともに振り返りシートから見えてきた。受講生らは、3チームに分かれての取り組み始めは「難しいわ」「なんでこんな絵本なん」と意欲的ではないことが分かる。自分たちで絵本を選定できるのではなく、筆者から訳の分からない絵本を渡されたことへの不満もとることができる。しかし、この絵本は、子ども達が大好きで今も保育現場ではよく読まれて楽しまれている本の中の代表作であることも伝え「言葉（オノマトペ）を味わってほしい」と見守る姿勢を示した。しばらくすると、最初は絵本をどのように表現していくのかを相談することから始め、アイデアを出し合いながら大体の構想を練って進めていることが分かる。その中で、Cチームが「ふあんふあん」と違って、なんで“ふんわふんわ”なんやろ」と耳慣れない言葉の表現に気づき味わい始めている。話し合った後から、身近に用意された物的環境として提示されたいろいろの素材を手に取り触れて遊んで、絵本の絵にある色・形・動きのイメージに合うものを選んでいくことが分かる。Aチームは、もこもこのシーンをどのように表現するのか、絵本にあ



写真9 相談しつつ素材を手に色・形・動きを探る

る絵の色と形からサテンの赤の布とフープを使って筒を作りその上下の動きを、その中に人が入りしゃがみ姿勢からゆっくり立ち上がる動きで表現を試みている（写真9）。続いて、「パクリ」と「ぼろり」を人とボールとの動きの対比で表現していく。筆者は、投げられた後のボールの弾みの動きと音が、静寂の空間の中に響き一瞬目が留まった。彼らは、「ぼろり」とボールを投げれば、自分の役割が済んでほっとしていたが、その時の静寂の中でボールの弾み音や動きに耳を澄ませ目を凝らすことが大事で、そこまでが「ぼろり」の表現として味わってほしいと強調した。このチームは、言葉に音を付けることのこだわりも見られる。Cチームでは、ユーモラスな動きを何とか表現できないかと試行錯誤が続いている。筆者から「○○という表現方法もあるのでは」とアドバイスをすると「黙ってほしい。自分たちで考えていることが迷走してしまうから」と、断られた。保育経験のある筆者は見通しが描けるが、彼らは子どもがどのような反応を示すか迷い揺れながらイメージをお互いに共有しつつ形作っている。その違いを再認識させられる一言となり、筆者は、反省するとともに当初の見守る姿勢を貫くこととなる。

それぞれチームとして活動を展開する中で、Bチームは「もぐもぐ」のシーンにこだわり、子どもにプレイクロスを手渡し、ボディソックスを身に付けた表現



写真11 素材を選び遊び アイデアを形にしつつ創り出す



者に食べさせてもらうという子ども参加型のアイデアを生み出した。これは、子どもを楽しませたい気持ちの方略の一つと読み取れる。

実習を済ませているが故のアイデアではなかろうか。一方で、風船に金銀の折り紙を貼り「ぎらぎら」をその風船を手でついて表現する。身近なのをうまく組み合わせるイメージに近い物を生み出していることが分かる。そこまでは順調の様子だったが、「ぱく」の表現を巡り、イメージの違いからか険悪なムードになっていく。それぞれが描くイメージの相違から生じた葛藤である。気づきに述べられた「ごちゃごちゃ」「だるい」という感覚的な印象は、そのようなチーム活動に対しての感情表出であったと読み取れる。10回目の授業でその当事者たちが欠席したことから、新たなまとめ役が出てきて、場面の大まかな表現内容が固まり見通しがそれぞれに持てるようになって11回目の授業では、その険悪ムードが少しずつ解消されていった。「ぶー」の表現を担当するDさんが、何事にも「いいよ」と始終笑顔で動いていたことは、チームが和む大きな環境だったと考えられる。Dさんが風船を膨らませる動作と息の入る音から醸し出すシーンは、非常に楽しいものだった。その息の音を味わってほしいと願い「耳を澄ませて聞いてこらん」と注意を喚起した。ボディソックスをまとうEさんの動きはとて大きくユーモラスであった。その中に入ってしまうと、視



A チーム 「しーん」



「もこもこ」



C チーム 「ふんわふんわ」

素材を選びイメージを形造っていくその過程で、個々のイメージが共有化されていく

写真 12 チームごとに取り組む様子

覚が鈍ることから「もぐもぐ」でブレイクロスを子ども（観客）に手渡す役の人たちが、自然体でサポートする動きが生じた。その頃から、互いの意見を受け入れ協調していく姿勢がみられるようになっていった。

『絵本「もこもこ」をどう表現するのか - 擬音語・擬態語の世界を味わう -』のテーマを受講生は、これらの3時間の創作活動を通して、絵と言葉から受け取るイメージに近い素材を選び、それをどのように自分の体を使って体とものを一体化して表現していくのか、何度も繰り返し試してイメージを具体化していることが分かる。その中で、イメージのぶつかり合いからの葛藤体験もしつつ、より良くしたいという共通の目的に向かって、創作過程の中で表現が共有化され、淘汰されていったと考えられる。この姿は、5歳児が就学前に取り組む協同的な学びの過程と全く同様である。

#### 【リハーサルと改良に取り組む】

今まで3チームに分かれて一冊の絵本15場面中の5場面を担当して創作に取り組んできた。12-13回の授業2時間は、リハーサルと他グループの創作を鑑賞し合う時間と計画した。BSBグループでは、この時間がそれぞれ担当してきた場面を通して行う初めての時間でもあった。グループの皆がそれぞれ持ち場で準備をする。Aチームでは、正面には絵本台を置いて「もこもこもこ」の絵本がたてられた。読み手はGさん。オープニングは絵本を読み味わうことから考えていた。筆者の絵本を大事してほしい意図を理解してくれていた。当初「もこ」のシーンは、高さを出したいことや「ぱくり」と飲み込む動きから椅子の上に立って高さを出して表現することになっていたが、ここでは椅子を使用しないことにした(写真12)。この方が安定し安全だったからである。Bチームは、「もぐもぐ」にこだわりボディソックスを身に付けての体と一体化したその動きがコミカルで他グループの仲間からも

ユーモラスで笑いを誘った。ラストシーンの静寂の中での静と動の表現が素晴らしかった。当初から考えられていた体全体を隠すように紫と



青のサテンの布をまとった表現者が滑り込んでじっと伏せた姿勢で静止し、その後「もこ」と尻を上げる。その表現は、見ていた他のグループから感嘆の声を誘った。彼らは、恥じらいつつも何とか15場面を表現できた。

すべてのグループの創作表現を鑑賞した後に、気づきをそれぞれがコメントして交流した(12回目の授業)。BSBグループの創作表現は、みんなの好感度投票で第3位だった。彼らは、その仲間の評価よりも、自分たちのグループが、ABCとチームで取り組んできたことから、AからB、BからCの場面のつながりができていないことに気づき、そこを考えていくことが課題となった。15人が終了した後に口々にそのことを語り確認していた。他のグループは仲間からの評価を受けて、授業者を中心に話し合いがあったり自主練習を授業時間外に取り組んだりと改良に励む姿が見られた。が、BSBグループは、課題



写真13 発表が済んで話し合う

は見つけたものの、自分たちで自主的に練習しようと声をかける人は現れなかった。そこで、筆者は13回目の授業において、リハーサル当日に撮影したVTRの視聴を通して改善点がより具体的にイメージできるように計画した。また、使用する用具や楽器などが使えるようにシーンごとに整えたり修理したりしておくことを伝えた。さらに、今まで提出された記録とともに、授業中に撮影した特徴的な取り組みの写真を添付した資料を作成して配布し、少しでも彼らに自信と意欲を持って創作活動を達成してほしいと願い「皆さんが仲間とこうして一緒に考え、協力して遊び(表現)を創り出す経験は、最初にして最後です!思い出づくりをしませんか・・・!?

子どもの最高の笑顔が見られるように!!  
一緒に楽しみましょう」とのコメントを添えて伝える努力をした。

【子どもの前で演じる間際のリハーサル】

4歳児の子どもの中で演じる発表会開場までの30分間が、それぞれのグループに最終リハーサルとして

あてられた。その時になって初めて、BSBグループ全員が一同に集まって場面ごとの表現を見合い「ここをもうちょっとこうしよう」「音はこれでもいいね」などと真剣な表情で話し合い一つ一つの表現にこだわりをみせた(写真14)。他グループの主体的な進行状況に焦りや不安を感じつつも筆者が見守り間接的援助の姿勢を貫いてきた成果が、ここに見て取れるよう



写真14 最終の打ち合わせ

だった。チームの中で個性がぶつかり合い険悪なムードもここではなくなっていた。本番を前にどうすれば一番いい状態で臨めるか、子どもたちの前で成功させたいという目的に向かってチームの取り組みからグループの取り組みへと深化する創作活動の姿が認められた。

【子どもの前で演じる - 絵本「もこもこもこ」の世界 -】

開演の時を迎えた。それぞれが持ち場にスタンバイをした。その中で、Fさんから「先生、もう一冊本ない? こっちも見んと分からんから」と、子ども達に聞こえない小さな声であわてた表情で助けを求められた。「あるよ」と、すぐに準備物入れのかごから取り出して手渡すと「ありがとう」と安堵とこれから演じる意欲が感じられる表情で素直な声が返ってきた。

絵本の読み手と決まったGさんが、絵本台に絵本を立てると、子ども達から「もこもこや」とささやき声が上がった。Gさんが「知ってるの?」と問うと子どもたちが頷き応答しあう。その後から絵本がひらかれていった。「しーん」「もこ」と語り表現が始まると、子ども達はその言葉を復唱しつつ目を凝らして表現者を見つめた。その雰囲気は表現者も後ろにスタンバイしている人にもじんじんと伝わった。みんなの顔が紅

潮しつつも恥じらいも消えて表現に打ち込んでいる姿が、そこにあった。人の体と心が一体になって表現が生れた。彼らは、4歳児はボディソックスを怖がらないかと心配していたが、怖さと動きのユーモラスさという対比に4歳児も心を奪われ見入っていた。何より引率の先生方の笑顔を誘った。その雰囲気の中で、子ども達も手渡されたブレイクロスを誘導と共にボディソックスをまとった表現者の口元に入れ、「モグモグ」と食べてくれるという繰り返されるやり取りを楽しんだ。彼らが考えた子どもを巻き込んで参加型にするアイデアが成功した。そして、正面に戻ってボディソックスとボールの対話する表現に展開されていった。印象的だったボディソックスが消えると、金銀を貼った色とりどりの風船を人が突いて登場し子どもたちの周りを囲んだ。突き上げられる音と光と風船のゆったり落ちてくる動きに子どもたちの笑顔があふれた。きれいだった。その風船が舞台袖に消えると、「ばーん」という音がして哑然となる。その響きが消えると、「ふんわふんわ」と言葉を言いつつ紫のチュールを頭にまとい、綿を先端に付けた紐を腰に巻いたHさんたちが登場した。今までの原色と違い白と薄紫という淡い色彩と柔らかな動きの対比が絶妙である。そしてラストシーンへとつなぎ、Hさんが布を全身にまとい体を消して滑り込む。そのまま静止し「しーん」とチャイムベルの音が鳴りその音の響きを聞ききって、「もこ」とその地面に想定した紫の布の中央が盛り上がった。その意外性と、音と動きに子どももおとなも魅了される中「もこもこ」の世界が閉じられた。子どもから送られる大きな拍手と笑顔を彼らは心とからだ一杯に感じていた。その時の印象を、15回最終授業の中で課せられた設問の中で次のように述べている。

【設問1】 今回の授業を通して印象に残っていることを具体的に述べて下さい。

・絵本「もこもこ」をBSBグループのみんなで表現したことです。身体を使って大きく表現したり、楽器や風船やブレイクロスなどを使って、表現を工夫して行ったことが、とても楽しかったです。幼稚園の子どもたちも見てくれたのでうれしかったです。

・やっぱり「もこもこ」の絵本を様々なことで表現し、発表に向けて取り組んだことです。「ばちん」「ふんわ」というようにひとつの言葉を表現することは、今まで

行ったことはなかったけれど、いざ行おうと思っていたより難しく苦労しました。その中でグループの仲間で自分の感じたことを話し合い、表現し、よりよく近づけるために考え、最後には、その言葉をしっかり表現することができました。

・「もこもこ」の作品を創り上げる際、初めは本の内容もよく分からなくて、どういうものを作るとよいか戸惑いました。でも、BSBグループの中で3チームに分かれて相談していくうちに、さまざまなアイデアがそれぞれ出てきて「フラフープを使おう」や「ボールを使おう」など本の世界に入ることができたと思います。作品を考えるごとに、チームが協力して取り組んでいて良い作品を作り上げることができてよかった。

・何の本を表現するのか「もこもこ」に決まった時に、こんな音ばかりの本をどう表現するのか悩みました。そして、本を様々なもので表現するために、面白い音のする楽器など準備されたものを使って表現していったことが面白かった。

・身体表現活動で、顔を出した状態での表現はとても恥ずかしくてできなかったけど、ボディソックスや布をかぶるだけで顔が隠れるため、相手の顔がみえなくて自分の思った通り表現することができた。

・最後の「もこもこ」の発表が一番印象に残っています。最初はすごくごちゃごちゃしていて、まったく言っていないほどまとまりがなかったですが、回を重ねるごとに意見がまとまってきてよかったと思います。

・言葉のグループで、小グループになって絵本の中の言葉を用意された物で表現するのが印象に残っている。からだを叩いて音を出したりして表現したりもしました。

・授業を通して音・声・身体・言葉の4つをモノを使ったり身体で表現したりして、予想以上に難しいことが多いと感じました。普段は、表されているものをただ決められた通りに表現することが多かったが、今回のような活動で、考え、伝えられるようにとみんなで試行錯誤しながら実践につなげていくことの大切さと、難しさの両方を経験することができました。一人一人が自分の思いを形にし、発表する機会があった時には、なるほどと思うこともあったし、みんなで意見を出し合い1つのものを作り上げるという喜びもあっ

た。

・擬音語を体で表現すること、登場人物をどの様に表すか、絵本にとらわれず自分たちらしさを出す

・絵本の音や絵を実際に存在する音や身体での表現で表すにはどうすればよいかを考え、工夫することが最も印象的でした。「もこもこもこ」の絵本の中でも分担して、私のチームでは「ふんわふんわ」を表現したのですが、「ふあふあしたもの」「絵本の中のイラストの形」を組み合わせて、色のつたフアファの布と綿を付けたスズランテープを腰に巻くことで表現するという形になりました。そして、体現だけでなく、動きと言葉をマッチさせることができました。さらに、絵本の色にもこだわり、紫色の布を使いました。

・ボディソックスのインパクトがとっても強かった  
・「もこもこもこ」の発表会。今までグループで活動してきて、みんなで意見を出し合い、みんなで協力して一つの作品が出来上がり、幼稚園のみんなが笑顔で楽しそうに見てくれたこと

・本番の発表がとても印象に残っています。発表した後も、子ども達が嬉しそにしているよかったです。

・見に来てくれた子どもたちは、このお話を知っていて、最初絵本を読むとその言葉を追いかけてこのように復唱していて、舞台袖にいた私は思わず笑顔になりました。予想外に盛り上がりよかったです。

【設問2】 今回の授業を通して取り組む最初と発表会を経験した後で「私が変わったこと」はなんですか、具体的に述べて下さい。

・何ごととも表現から繋がるし、感じることもあるという事です。私たちは日頃から何事も考え行動してしまっているけど、子ども達はいつも柔らかい考え方と優しい気持ちで物事を感じていると思いました。その為に、恥ずかしく思うのではなく全身で表現することが大切だと思いました。

・最初は一つのこともどう表現したらいいのか。身体は、物はどう動かしたらいいのか、どう使ったらいいのか迷うことが多く積極的に動いたりできませんでした。しかし、授業の回数を重ねるにつれて、こうしたら面白い、これを使ったらこの表現ができるなど次々とアイデアが浮かんでくるようになり、自分自身も表現することが楽しくなってきました。普段の生活でも一つ一つの言葉について、いつの間にか考えたり、こ

の言葉おもしろいな、こんな風に表現できそうとも考えることもありました。この授業を通して、自分の感性が前より少し豊かになったし、どうしたらもっと伝えられるかを考えられるようになったと感じています。

・「もこもこもこ」の絵本は、字数が少なくて内容が難しいと思いました。その時に、BSBグループで「もこもこもこ」の作品を創ることになって、最初はどのように絵本を表現したらいいのか戸惑いました。でも、チームごとに話し合っどどのようなものを使って表現するとより「もこもこもこ」の絵本に近づくことができるか話し合い、フラフープを使ったり、ボール、クラッカーなど様々なもので表現することにしました。それらを使いながら、もっと良くするにはどうすればいいのか何度も絵本と自分たちの表現を見比べては考え直しを繰り返しました。私が変わったことは、初めは見ての方が多かったけど、どのようにしたらもっとよくなるかなどグループの人達と考えるうちにアイデアを提案するようになったことです。

・私がこんな風にしたら子どもたちは楽しまないだろう、怖がるだろう、ほんとうにたのしめるのか?など考えていましたが、子どもの前に立つとそんな気持ちはなくなりました。一つ一つの動きを笑ってくれて、繰り返し絵本の言葉を声に出して復唱してくれました。音にびっくりするんじゃないかとも思っていたが、そんなこともなく楽しんでくれて本当によかったです。子どもに対する考え方が変わりました。

・表現活動を発表と聞いたときは少し嫌でした。私のグループは「もこもこもこ」を表現したけど、絵本の内容や作者がどういう気持ちで書いたのか読み取ることができませんでした。そのため、何かを作ったりして表現を考えるだけで大変でした。しかし、授業を重ねてチームの改善点を話し合っているうちに、どんな風に表現すると面白いとか分かりやすいなどがみえてきて楽しめるようになりました。発表してみると、最初絵本を読んだときに、子ども達が復唱してくれて驚きました。子どもたちの反応がとてもよくてよかったです。

・前は人前に立って何かをするというのがとても苦手でしたが、恥ずかしさなどは忘れて取り組めたことです。発表するまでの段階で、少しもめたりしていましたが、皆で一致団結して発表できてよかったです。皆が自分でたくさん表現して、良いところはたくさん取り入

れてみることもできるんだなと思えたこと。

・何も考えずに、体を動かしたり絵本を音でたとえたりして、思いついたことをすぐにしていました。今回の「もこもこもこ」で子どもたちがどうすれば喜んでくれるかと、みんなと相談して考えていったところです。チームごとに1冊の本を考えていて、自分のチームだけでなく、どうしたら次のチームに繋がるか、自分のことだけでなく、考えて作品を作っていたところだと思います。

・授業の最初の方は、自分から意見を出すことはあまりなかったけれど、グループ活動が増えてからは、どうすればグループで考えて実践につなげることが出来るか考えるようになり、自分から動くようになっていったと思います。表現活動にはいろいろな表現の仕方があることを知ることができた。

・正直、始終何をやっているのかわからない状態が続いていて、いっそみんなが劇をした方がいいのではないかと思っていた時期もあった。絵本を自分たちで選べるのでもなく、先生のアイデアが先行されつつもあり、やって楽しいと思える回数は少なかった。しかし、終盤は、開き直って自分たちのアイデアを先行し、自分たちで作りに上げていくことができた。そのアイデアに必要な材料を先生がすぐに準備して下さったことに感謝しつつ、より子どもたちが喜んでくれるようにやるだけのことはやった。途中で気持ちを切り替えて頑張ろうと思えたので私自身の変化は大きくあったと思う。

・今回の授業によって、今まで修得してきた音楽、造形、身体、言葉の各表現活動のすべてを合わせた作品を作り上げるということで、今までの授業とは全く違った取り組みで、初めの頃は困惑しながらもついていくことに必死だったように思います。しかし、回を重ねていくうちに自分でやれることを探しグループの一員として、子ども達に楽しんでもらえる作品になるように積極的に活動に参加して行けるようになった。表現の幅を広げ、表現の方法を試みていくうちに、自分自身の中でも表現の方法が増えたとし、アイデアを考えだし、形作っていくやりがいや楽しさも感じられた。そして、発表会を終えた今も、私たちが今まで頑張ってきたことで、子ども達のとびっきりの笑顔を見ることができ、意味のあるものだったことを強く実感できた。そして、人と関わり、アイデアを出し合ったり、

協力して一つのを生み出すことの楽しさを感じられるようになったのも私が変わった事です。

・この授業の当初は、考えたりするのが面倒だと思えることもあったり、ボディソックスとか恥ずかしいとかいろいろな思いがあった。グループ活動が始まってもまとまりがなかったり、本当にこれで大丈夫なのかと思っていた。しかし、授業でいろんな活動をしていくうちに、最初は恥ずかしいなど思っていたことがボディソックスを着てもとても楽しんでいる自分がいたり、グループもまとまり初めて楽しくなった。今日発表をして、恥ずかしさは全くなかったし、いい物を作り上げたという思いも強くなってきている。グループで協力しあうことは、とてもいいことだなあと授業を通して実感した。

・授業を通して取り組む最初は、恥ずかしいという気持ちがありました。しかし、取り組むうちに恥ずかしいということはなくなり、存分に体を動かして表現することができました。子どもたちも喜んでくれてとてもよかったです。

・最初の授業はただ楽しく受けているだけでした。後半から、発表に向けて創作活度が中心になり、他のグループのリハーサルを見て焦りを感じました。自分が思っていることを他のグループがやっていて、自分のグループはできていなかったからです。その焦りから、授業ではなるべく自分の意見を伝えたり、みんなと一緒に考えて作品を作ろうという考えになりました。本番を終えて、最初は楽しいだけで受けていた授業が、やってよかったに変わっていました。

・いろんな表現をしてみて、最初は恥ずかしいと感じる動作もあったけど、だんだん授業をしていくうちに楽しくなり恥ずかしさが消えた。「もこもこもこ」の取り組みもスムーズではなかったが、最後まで練習できてよかったです。そして、練習の楽しさ、チームワークの重要さを感じた。

---

筆者がオノマトペに注目して選定した絵本をグループで表現活動として取り組んできた。4歳児を招待した発表会を済ませた後に「印象に残った事」と「私が変わったこと」との設問に対して、上述の記述では、3点のことに関して述べられている。

①オノマトペの表現すること（波線）

②グループ活動を通して協力できたこと（実線）

③子どもが楽しんでくれたこと（二重線）

オノマトペに出会い「意味わからん」との消極的な受け止めがあったが、感覚的なオノマトペは意味の定まった言葉ではない。実感を伝える言葉である。感じるがままに表現することが求められたからこそ、「普段は、表されているものをただ決められた通りに表現することが多かった」から難しいと感じたのである。しかし、絵本であることから、絵から受けるイメージは大きかったと考えられる。その個々のイメージを身近に用意されたものを手に取り触れて確かめながら表現していった様子が「ふんわふんわを体現したのですが、ふあふあしたもの、絵本の中のイラストの形を組み合わせ、色の付いたフアフアの布と綿を付けたスズランテープを腰に巻くことで表現するという形になりました」と述べられている。感覚的な表現であるがゆえに、オノマトペを感じ取るのは一人一人違う。その違いを「初めは見ていることが多かったけど・・・グループの人たちと考えるうちに自分からアイデアを提案するように」なっていたり、「さまざまなアイデアが出て本の世界に入り込めた」り「一人一人が思いを形にして「みんなで意見を出し合い一つのものを作り上げるといふ喜び」も味わい「みんなで協力して一つの作品ができた」のである。その作品を「幼稚園のみんなが笑顔で楽しそうに見てくれた」ことが「苦労したこと」「試行錯誤したこと」「恥ずかしいと感じていたこと」を忘れさせるだけの大きなつまり達成感や充実感につながったのである。

ここに述べられた一人一人の感想から、オノマトペの絵本に出会い、困惑し仲間と試行錯誤を重ね協力する中で、表現の多様性に気づき子どもに伝わるようイメージが形作られていくことに喜びを味わっていった学びの過程を読み取ることができる。そして、発表会で見た子どもの姿に接して表現する心情・意欲・態度が高揚していったのである。

次に、平成26年度の第1次研究で実施したアンケート項目の一つで、筆者の研究課題となった「表現活動を指導する保育者の資質として重要な事柄」を同じ内容で学生にこれらの質問を同じときに実施した。その結果が、右上表7である。数値は実数である。

表7 表現活動を指導する保育者の資質として重要な事柄

表現活動を指導する保育者の資質として重要な事柄	重要でない	あまり重要でない	どちらでもない	重要	非常に重要
身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する豊かな感性	0	0	1	12	48
身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する技能	0	1	4	29	27
身体・音楽・造形・言語等の表現活動にかかわる教材などを子どもの発達に合わせて作成・活用する能力	0	0	1	17	43
身体・音楽・造形・言語等の表現活動の指導法の習得	0	0	2	25	34
保育のねらいに則し、子どもの遊びを豊かに展開するための技術の習得	0	0	0	21	40
表現活動の観点から子どもの発達をとりえ、具体的な表現活動に結びつける事のできる能力	0	0	0	15	46

実践者の結果（p211 参照）と同じく「豊かな感性」に61人中48名が非常に重要と受け止めている。実践者との違いは、「子どもの発達」「子どもの遊び」「子ども理解」と書かれた3項目に関しても「非常に重要」と捉えている点である。これは、子どもを楽しませたいとの思いでこの表現活動に取り組み、どうすれば喜んでくれるのか、これでは怖がらないかと常に子どもの姿に注目していた証とも考えられる。この授業を通して、感性の重要さとともに、幼児理解を深め、幼児の遊びや幼児の発達の視点の重要さに気づけたことは大きな成果と考える。

おわりに

保育現場の先生方から求められている保育者の資質として挙げられた「感性」を養成校で学生に要請する試みとして擬音語・擬態語に注目して授業を展開してきた。オノマトペ（擬音語・擬態語の総称）は、日本語に特に発達してきていると言われている。擬音語は、物が落ちた音、機械の音、車の音など人間の発声器官以外の音を、人間が聴いて言葉に置き換えたものである。一方の擬態語は、音なきものに音を聞いて言葉に置き換えたものである。それ故に、その感じ方によってその表現や意味の受け取り方が微妙に違ってくる。そこに注目して絵本「もこもこ」を取りあげた。

絵本に出てくる「ふんわふんわ」と言う擬態語に、学生たちは自分たちの生活でよく使用する「ふわふわ」との違いにまず気づき、不思議さを感じ身近なものの感触や動きを探り試行錯誤してその擬態語を感じ取っていった。「ん」が「ふわ」の真ん中に入る感覚を「ふ

から「ん」で体を沈め「わ」で元に戻るスローな動作で表現した。音なきものに音を聞いて言葉に置き換えた擬態語から音を聞いて動きを感じて、表現したのである。その活動のなかに感性を育み研ぎ澄まされる瞬間が存在するのではなかろうか。

本稿は、文部科学省科学研究費補助金〈基盤研究(c)26381297(平成26年度～平成28年度)〉の助成を得て実施した調査<sup>1)</sup>をもとに、智原らとともに日本保育学会第68回ポスター発表「幼稚園・保育所における表現領域の活動と保育者の専門性」、第69回ポスター発表「クロスカリキュラムを用いた保育内容「表現」の授業開発」の論文の中で、筆者が担当した「言葉」の表現領域に加筆するとともに担当した授業の試みを論じたものである。

#### 引用文献・参考

- 1) 智原江美・鍋島恵美・和田幸子・下口美帆・田中慈子,「幼稚園・保育所における表現領域の活動に対応した保育者養成のあり方—京都府南部の幼稚園・保育所へのアンケート調査からの検討—」京都光華女子大学研究紀要第53号 pp119-134
- 2) 智原江美・鍋島恵美・和田幸子・田中慈子,「幼稚園・保育所における表現領域の活動と保育者の専門性」日本保育学会第68回論文集 pp765
- 3) 智原江美・鍋島恵美・和田幸子・田中慈子,「クロスカリキュラムを用いた保育内容「表現」の授業開発」日本保育学会第69回論文集 pp805
- 4) 文部科学省,「幼稚園教育要領解説」2008,フレール館 pp23-29,pp120-179
- 5) 厚生労働省編,「保育所保育指針解説書」2008,フレール館
- 6) 相場雅子,「総合的な活動から理解する保育内容」全国保育士養成協議会第54回研究発表論文集,pp125
- 7) 福西朋子,柳瀬慶子他2名,「表現方法授業における現状と課題-保育学生の学びから-」全国保育士養成協議会第54回研究発表論文集,pp156
- 8) 岩田純一著「子どもの友だちづくりの世界」,2014,金子書房
- 9) 小野正弘著「感じる言葉オノマトペ」2015,角川

#### 選書

- 10) 佐々木正人著「新版 アフォーダンス」2015,岩波書店
- 11) 松居直著「声の文化と子どもの本」2009,日本キリスト教団出版局
- 12) 松岡享子著「お話を語る」,1994,日本エディタースクール出版部

#### 取りあげた絵本

- 1) 谷川俊太郎文/大竹伸朗絵「んぐまーま」2012,クレヨンハウス
- 2) 谷川俊太郎文/長新太絵「にゆるぺろりん」2012,クレヨンハウス
- 3) 谷川俊太郎文/おかざきけんじろう絵「ぼばーへぼびぱっぷ」2014,クレヨンハウス
- 4) 谷川俊太郎文/下田昌克絵「あーん」2015,クレヨンハウス
- 5) 谷川俊太郎文/奥山民枝絵「とこてく」2012,クレヨンハウス
- 6) 谷川俊太郎文/元永定正絵「もこもこもこ」2015,文研出版

#### 謝辞

本研究の資料提供をしてくれた学生の皆さんや共同研究者の先生方に、共に学びあえたことを深く感謝申し上げます。